Caxton と初期近代英語[1]

中　尾　祐　治

Caxton の刊本の一つに Malory の *Le Morte Darthur* (1485年印刷) があるが，この刊本は1934年以前には Malory の lost original を推定するため利用しうる最も古い text で，Caxton 版（以下C）後の数多くの刊本もすべて例外なく直接間接にCに依るものであった。1934年 W. F. Oakeshott によって偶然同一物語の MS. が Winchester で発見され，1947年 E. Vinaver によってこの Winchester MS.（以下W）の校訂版が上梓されて以来，Cとの関連において新たな課題として，この作品の unity の問題，作品内の物語の制作順序の問題，Malory という人物の identity の問題，WとCの言語の比較の問題等がクローズ・アップされるようになった。特にWとCの言語的差異に関し，外国で発表された主な論文や著書に，J. Šimko (1957), S. Sandved (1959), S. Shaw (1963), W. Matthews (1966), L. S. Martin (1966), S. Sandved (1968) 等があるが，未調査または exhaustive に調査がなされないまま残されている言語現象が依然として多いことは S. Knight (p. 5) が "…the patent linguistic differences between the two texts … await a full scholarly examination." と述べていることからも推測されよう。これらのうち一番新しく，最も詳細な data を示した労作である Sandved (1968) の著述は，WとCの verbal morphology の組織を比較し，それにより Caxton が近代標準英語の発達に果たした役割を探ろうとした試みである (cf. Sandved, p. 9)。本稿の目的は Sandved の論述の方法を批判し，彼の提起した問題を，同じくWとCについてではあるが，彼とは別の，筆者自身が蒐集した資料で考えてみることである。

E. Vinaver (p. cii) によればWとCはほぼ同時代のもので，いずれも共

通の original から三度の転写を経たものである。言語的には，ともに大ざっぱに言って15世紀後半のロンドン標準英語で書かれており，Bk. V（W の *Arthur and Lucius*）を除外するとWとCはほぼ一語一句 parallel しているが，それぞれが転写を経るうちに生じた spelling, grammar, vocabularly の異同が散在する。それらは standardization が施された結果を示したり，Malory の original dialect の痕跡を示したりする。Vinaver（p. cix）は，Wの scribes（二人）は比較的機械的に copy text を転写したと考えているが，一方Cでは Caxton により多かれ少なかれやや意識的な言語上の standardization が行われたと推定している。要するにこのようにして存在するWとCの言語上の差異が比較の資料となるのである。

英国最初の printer である Caxton は，彼自身の言葉を借りれば，"rude and vnconnynge man" のためでなく "clerkys and very gentylmen that vnderstande gentylnes and scyence"（Crotch, p. 109）のため，粗野で古風な表現を回避し，理解され易い英語で書物を出版することを目標にしていた。ところが彼が印刷活動に従事していた15世紀後半は，M. E. と Mod. E. の推移期であり混乱期であったので，当時進行中であった London dialect と court usage による英語の標準化の過程は zigzag な道を辿っていたようである。Caxton 自身も *Eneydos* の Prologue でそれを証言し，有名な *eggys* と *eyren* の挿話とともに英語の地域差のはなはだしさと推移の速度の速さに言及している。彼の "certaynly it is harde to playse euery man/ by cause of dyuersite & chaunge of langage"（Crotch, p. 108）とか，"bytwene playn rude / & curyous I stande abasshed"（Ibid., p. 109）という言葉は，こうした言語的混乱のなかで出版業者として standardization の際の dilemma を指摘したものである。しかし印刷・出版業を営む Caxton にとっては，彼の印刷本を購入するあらゆる人にとって受け入れられる linguistic form を見出すことが関心事であり，彼の判断で英語を standardize する必要にせまられたわけであるが，その際 Caxton が果たした役割というのが Sandved の研究の主目的である。

Sandved は彼の著の "Introduction : Purpose" の章 (pp. 9—10) で，この点に関する従来の学者の見解が，彼を引用すれば，"That is a question on which opinions have differed." (p. 9) であり，Caxton が conservative であったとみなす側として H. C. Wyld と H. Römstedt を挙げ，両者からそれぞれ，"Caxton was not an innovator." (Wyld, p. 86), "… er (i. e. Caxton) … hat auf theoretische und subjektive Neuerungen als praktischer Geschäftsmann in echt englischer Weise verzichted." (Römstedt. p. 54) という comments を引用している。他方これに対立するものとして H. Wiencke (p. 226) の "Caxton ist durchaus nicht so konservativ, wie es nach Römstedt den Anschein hat." という見解を示し，さらに Wiencke (ibid.) が Caxton の英語に "einen Willen, der mit den Jahren zunehmend aus dem mittelalterlichen sprachlichen Wirrwarr den Weg findet zur neuzeitlichen Klarheit und „Ein"heit" を見出すという見解を引用している。これらの，彼によれば対立する意見のうち，WとCの verbal morphology を資料にした場合 Wiencke の主張がどの程度有効であるかを実証するのが Sandved の目的である。

ところがこの前提には二つの点で問題があると感じられる。その一つとして，Wiencke は Sandved が最初に引用した文にすぐ引き続き，"Zum andern greift er aber auch nicht revolutionierend in den geschichtlichen Werdegang ein." と述べ，さらにそれより数行後で，"Er knüpft an das Vorgefundene an, ohne sich allerdings——und das ist das Wesentliche——für immer daran zu binden." (ibid.) と述べているが，これにより，Wiencke は，Caxton が innovator であると積極的にみなしている訳でなく，やはり conservative な面を認めていることは明白である。Wiencke の主張は conservative であることの度合いが Römstedt のいう程でないと述べているに過ぎず，従って Sandved のいう "… opinions have differed." というほどの対立では決してないのである。Caxton の言語が多かれ少なかれ conservative であることはこのようにほぼ一致した意見で，

Sandved が引用した学者以外にも 'conservative' 説を唱える側として，例えば Heltveit (p. 89) の "From the available investigations on Caxton's language, … we are at least entitled to draw the conclusion that Caxton was not a radical reformer pursuing quite definite aims." という見解を挙げることができよう。

第二は，Wiencke の "Caxton ist durchaus nicht so konservativ …" と "neuzeitlichen Klarheit, Einheit" とは厳密には異質の概念であるが，それを一括して Wyld 等の 'conservative' 説と対立させていることである。Römstedt, Wyld, Heltveit が 'conservative' 説を唱えるのは，Caxton の英語を英語史に位置づけた上での評価であり，例えば Wyld (p. 87) は "In regard to inflexional endings Caxton appears to be very much at the stage of Chaucer." と述べているし，また Wiencke の Römstedt 批判の部分も同様に通時面に関してである。一方 "Klarheit, Einheit" は統一の方向を意味するが，Sandved は実際にCに適用した場合 allomorphic variation がより少ない意 (cf. Sandved, p. 313) に解している。これをも含めて Wyld 等と対立させ，" … opinions have differed." ということが誤っているのは，早い話が standardization によって統一 (Einheit) された語形に英語史的評価を与えれば conservative である場合が存在することからも明らかである。

ところで上述のような目的を述べ，次に exhaustive な資料を呈示した後，Sandved (pp. 435—6) は次の結論を導いている。(1)CはWより allomorphic variation が少ない。Graphemic system についても同様で，C はより modern stage を示している。Wと異同の生じるCの語形は Wiencke の記述する translator としての Caxton の言語に一致することが多く，このことは異同の責任の多くが Caxton にあることの証拠である。従って Wiencke のいうように，Caxton は M. E. の chaos から脱し，clarity と uniformity を求めていたことになる。(2)しかし Wiencke のいうこの傾向は printer, Caxton の場合，次の理由，すなわち "… there can be no doubt that this

tendency in Caxton was to some extent counteracted by his faithfulness to the language of the MS he was printing from." (Sandved, p. 436) のため多少修正される必要がある。Wiencke の "Caxton ist durchaus nicht so konservativ…" という結論は translator としての Caxton にはよく妥当するが, printer としての Caxton についてはこれを修正し, "But the comparison between the language of C and Caxton's own language as described by Wiencke leaves us with the distinct impression that Caxton, the printer, was considerably more 'conservative' than Caxton, the translator." (p. 436) と結論している。

この結論により我々は Sandved の論点が, 実は 'Einheit' 論であり, 彼が実際には Wyld 等の述べている意味での 'conservative' 論に係っていないことを知るのである。前者は共時的な問題であり, 後者は通時的に処理すべき問題である。しかし Sandved は序文で後者をも論じるかまえをとり, 対立させた見解のうち Wiencke を支持することにより, Wyld, Römstedt を否定することになるので, 読者には translator としての Caxton, すなわち Caxton 自身の言語習慣は通時的な意味で当然 innovator であったという印象を与える危険がある。また結論(2)では 'Einheit' 論とは異質であるはずの "Caxton ist durchaus nicht so konservativ…" を再び持ち出し, これを translator, Caxton に妥当する見解とし, Caxton は本来 innovator であるという含みを持たせた上で (この解釈も問題であることは筆者が先に示した通りであるが), これと対比して printer, Caxton は copy text に忠実なだけ translator, Caxton より conservative と考えている。このような対比が存在する以上, この結論を通時論として読むことが可能である。そうとすれば, MS. に忠実に印刷されている部分は英語史的観点から進んだ言語現象であるといえるのに, ときおり散在する異同で Caxton による改定と推定される部分に, 通時的にいって, かえって conservative であると評価されねばならない場合が Sandved の資料にも多く存在しているから, こうした表現での結論は筆者には受け入れ難い。[(2)] Sandved は多分結論(2)を translator,

Caxton の言語習慣から予想されるより多くの allomorphic variation が C に見出されるという意味で conservative と述べたものかも知れない。そうであるならば 'Einheit' 論を論じるのに Wyld 等の 'conservative' 論を持ち出して，通時論と共時論を混合させるようなことはせず，'Einheit' 論だけの枠内で innovator, conservative を定義し，その上でこれらの語を使用すべきであったように思われる。もう一言すれば，共時的な研究であろうと通時的な研究であろうと，ここで言及されているテーマに関する限り，WとCの差異から抽出してえられるCの言語を問題にすべきであると筆者は考えるので，Caxton が MS. に忠実である部分を conservative と述べることは，Caxton 自身の英語とは無関係なW，C共通部分の言語，すなわち Malory 自身の英語[3] に評価を与えることになり Caxton から逸れてしまうか，または印刷の際の Caxton の copy text への忠実度自体に conservative という評価を与えるという欠陥に落ち入ることになるように思う。

以上で，Sandved はWとCの verbal morphology について，共時論的枠内で allomorphic variation の大小を論じたが，彼の序文で言及した Caxton による standardization の歴史的方向については実際には論じていないこと，そしてWとCの言語の比較にはこの二つを別個に扱うことが必要であることが明らかになった。ところで Sandved の 449頁という大著の中身の大半はWとCの動詞の語形に関する exhaustive な頁・行数の reference よりなり，P. H. Salus (p. 264) が書評で，"This is…(an) unreadable book. It is unreadable in the same why that any compendium is : for Dr. Sandved's volume is, for the most part, a compendium of the verbal system of Caxton's edition of Malory and the solitary ms." と述べている如き内容のもので，一種の concordance として今後の研究に資することが大きい労作である。従ってこの資料を利用し，これを通時的枠で捕え，Sandved が行っていない innovator, conservative の分析を行うことは興味ある問題である。しかしここでは一応それはさておき，筆者自身の材料でこの問題を論じてみることにする。先に外国でのWとCの言語の比較を扱った論

文・著述を紹介したが，筆者もこの線に沿った調査に従事しており，今までに若干の論文を発表して来た。これらはWとCの差異の記述そのものを目的としたものであるが，これらの data からWと相違するCの言語現象を抽出し，[(4)] それに通時的評価を与えることを試みてみたい。Wは前述のように新しい資料であり，Caxton が conservative か否かに言及した Wyld, Römstedt, Wiencke, Heltveit は利用していない。Caxton には printer（または editor), translator, author (prologue や epilogue の執筆者としての）の三つの面があり，そのうち translator, author としての Caxton の英語は比較的よく研究が行われているが，この新しいWとCの言語的差異という資料により，新たに Sandved が持ち出したこの古くからの問題を考えることは無意味ではなかろう。

第一に「純粋な迂言の (purely periphrastic) *do*＋inf.」(以下 *do x p*) と「使役の (causative) *do*＋inf.」(以下 *do x c*) の，同形式で意義の異なるために生じる二つの構文の polysemic conflict の歴史に焦点を合わせて，Wと相違するCの改定を検討してみる。*Do x p* の起源に関しては諸説紛々としているが，それは当面の 'conservative', 'innovator' 論とは直接に関係しないので，仮に最も有力な Ellegård の説を例にとることにする。Ellegård (pp. 28ff.) によれば，肯定平叙文における *do x p* は，13世紀後半の South West 方言において，*do x c* から意味の交換 (permutation) を経て発生したもので，文献に残っている資料では最初韻文に現われ後には散文にも浸透している。*Do x p* 発生後も *do x c* は依然として存続したが，「*do*＋inf.」(以下 *do x*) という一つの言語形式が二つの意義を担うようになったため，使役用法はやがて衰微の方向をたどった。ところで我々の問題としている15世紀後半には *do x* の迂言用法の勢力は決定的となり，肯定平叙文に加え15世紀初頭前後より現われ初めた疑問文，否定文における *do x p* も徐々に増加していた時代であるが，*do x c* もまだ完全に文献から消えていなかった。従って15世紀後半においては *do x c* に執着する傾向は conservative であり，*do x p* はその逆といえる。

この背景を念頭に入れてWとCの関係を検討すると，Wと比べてCの傾向が大ざっぱにいって二つ指摘される。その一つは Caxton が使役の *do* の数を増加させていることである。Wでは肯定平叙文における *do x* が38例見出される。[5] このうち確実な *do x c* は And all the batayles that were done in Arthurs dayes, Merlion dud hys mayster Bloyse wryte them. Also he *dud wryte* all the batayles that every worthy knyght ded of Arthurs courte 38/1 等2例でその他 *do x c* か *do x p* か equivocal な1例を除くとすべて *do x p* と解せられる。すなわちWは *do x* を迂言的に使用する傾向の作品といえよう。一方Cではこの *do x c* が Also he *did do wryte* all the batails that euery worthy knyght dyd of arthurs Courte 62/9, 10 と *did do x* 構文に改定されており，他に Bk. V を中心にWとは独立した *did do x* が10例[5]使用されている。この *did do x* 構文は一般に *do x c* の基盤の強い作品に現われるもので，Ellegård (p. 115) は "The spread of periphrastic *do* had its repercussions on the use of causative *do*, and one of the results of this interference was the spread of *did do*." とその由来を説明している。Cはこの *do x c* の強化構文 *did do x* によって使役の *do* の頻度を増加させているのである。

もう一つはCではWにおける上記38例の *do x* のうち8例[5]が単純形 (e. g. W Merlyon *ded shew* hir in a roche 126/21 → C Merlyn *shewed* to her in a roche 119/37) やまたは他の表現 (e. g. W Merlion *dud make* kynge Arthure that sir Gawayne was sworne to telle of hys adventure 108/26 → C merlyn *desyred* of kyng Arthur ȝt Syre Gauayne shold be sworne to telle of alle his auentures 109/6) に改定されていると言うことである。[6] また同様にWに見出される6例の疑問文における *do x p* のうち1例が，W *doste* thou *know* this contrey or ony adventures … ? 254/32 → C *knowest* thou in thys countrey ony aduentures 184/30と単純形に変えられている。Caxton はこのようにして自己の言語習慣に反した迂言の *do* を回避し，同時に使役の *do* を増加させているが，これは

conservative とみなすことが出来よう。なお Engblom (p. 95) の調査によると Caxton は1489年以前は *do x* を使役に使う強い傾向があり，それ以後自己の言語習慣を改め，*do x p* を使用し始めているという。ちなみにCの印刷は1485年である。

第二に拙稿 (1972) の data に基づき，動詞の final-*n* について考えてみよう。e. M. E. における語尾水平化現象の一つに O. E. *-an*, *-um*, *-on*, *-en* に由来する語尾 *-n* の消失がある。この消失現象は S. Moore (p. 238) によると1050—1300年の間が最も活発であったが，消失完了の時期は文法範疇によって一様でない。D. W. Reed (pp. 257ff.) によると，*-n* 保存の最後の実例が見出される時期が15世紀後半頃である範疇は，①現在・複数，②過去・複数，③不定詞で，彼の資料による消失完了時期とその地域は，①1525, S. E. Midlands, ②1500, S. E. Midlands, ③1500, S. E. Midlands, N. W. Midlands である。従って15世紀後半にこれらの範疇で *-n* を保存している場合は，conservative な現象であるとみなされよう。

次にWにおいて *-n* を保存している範疇を調査し，それをCと比較する。Bk. V (*Arthur and Lucius*) を除く全篇で，Wにおいて *-n* を保存している範疇は，①現在・複数：*ben* の場合のみ，②不定詞：(*to*) *done* の場合のみ，③強変化過去分詞である。③については P. E. においても依然 *-n* を保存する語があり，*-n* 消失の歴史も他の範疇とは事情を異にしているので一応さて置き，①，②について言えば，*-n* の現われる頻度も *-φ* に比して著しく低い。一方これをCと比較すると，動詞の全範疇で，Wの *-φ* がCの *-n* に対応する場合が 127 例，逆にWの *-n* がCで *-φ* に対応する例が 32 例であることが分る。このことは Caxton が印刷の際 *-n* を加えた場合が多いことを示している。上記 127 例を動詞の範疇ごとに分類すると，(a)不定詞 5 例，(b) *be* 動詞の現在・複数37例，(c)*be* 動詞以外の現在・複数 4 例，(d)過去・複数 5 例，(e)*be* 動詞の過去分詞 18例，(f)強変化動詞の過去分詞58例である。これによりCではWに存在しない過去・複数における *-n* が存在し，不定詞では *to done* の外に *to ben* にも，直説法・現在・複数では *be* 動詞以外に一般動詞

にも *-n* が分布していることが判明する。つまり数量的にも，範疇の種類においても，同一範疇内の *-n* をとる語の数においても，*-n* がCにおいて豊富である。一方逆にWの *-n* がCで *-φ* に対応する32例の内訳は *be* 動詞・現在・複数3例，強変化動詞の過去分詞29例で，ほぼ強変化動詞の過去分詞に集中している。強変化過去分詞については15世紀後半が *-n* 消失の決定的時期ではないため，詳細な検討は略すが，この29例とさき程の (f) 58例のうちほぼ半数が *come(n)*，(W-*n* → C-*φ* 25例，W-*n* → C-*φ*11例) と *overcom(en)* (W-*φ* → C-*n* 6例，W-*φ* → C-*n* 皆無) の異同で，O.E.D. によれば既に13世紀から *-n* 消失が進んでいるこの語形のうち，Cでの保守的方向への改定が，逆の場合より数的に多く見られる。以上のように動詞の各範疇を総合的に検討すると，Cに conservative な *-n* が多く，Caxton がこれらを大幅に増加させたと推定することが可能である。

第三に O.E. *cyn(n)* の syntax を継承した *maner* を考察してみよう。O.E. *cyn(n)* は本来「*cynnes* (単数・属格) ＋名詞」，「*cynna* (複数・属格) ＋名詞」の構文を形成していたが，北部では無屈折化した *cyn(n)* が後続の名詞と同格に並置される用法も存在した。また属格・複数の名詞が *cyn(n)* を限定することも行われ，そして既に O.E. において *of*-phrase による「*cyn(n)* ＋*of*＋名詞」を見ることもあった。ところがフランス語起源の同義語である無屈折の *maner* が12世紀頃借入され，その結果「*maner*＋名詞」と「*maner* ＋*of*＋名詞」が次第に *cyn(n)* による上記各構文にとって代わっている。C.S. Baldwin. (pp. 9—10) は Malory の時代が *maner* によるこの二つの構文の推移期にあたると述べ，古風な Chaucer's usage (e.g. al *maner* thynge) が残存していると同時に *of*-phrase の後続する *maner* の構文も使われていると述べている。

ところでこの二つの構文の間の，WとCの異同は少なくとも12例 [7] 見出されるが，そのうち10例はCで *of* が除去されている。e.g. W what *maner of* knyghte 351/8 → C what *maner* knyghte 262/21, W no *maner* of degré 270/21 → C no *maner* degree 197/35, W all *maner of* thynges

125/8→C al *maner* thynge 118/31, W on thys *maner of* wyse 54/24 →C in this *manere* wyse 74/22, 同様に W 377/23→C 279/8, W 388/15→C 288/26, W 402/32→C 301/10, W 644/25→C 475/15, W 701/26→C 514/31, W 1119/5→C 771/5 (逆の例は2例, W 683/2→C 500/12, W 1227/16→C 839/15)。以上資料の絶対数が少なく，反例もわずかにあるが，方向としてはCはWと比べ保守的な改訂がなされていると言えよう。

第四に O.E. 以降の指示代名詞の語形の単純化の過程で，15世紀の後半に最後の rivalry となった複数形 *thise* と *these* および *tho* と *thos(e)* に焦点をあててみよう。まず前者について述べると，O.E. の屈折体系崩壊後，例えば13世紀には，大ざっぱに言って，Northumbria *þir*, North Midlands *þise*, South West Midlands *þeos*, South West *þeos*, *þes*, *þis*, London *þese*, Kent *þos* がそれぞれ複数形として用いられていたが，15世紀に至り London dialect が標準語として確立するなかで，これらのうち *thise* と *these* が最後に競うことになる。以下これらを必要に応じ *i*-type, *e*-type と称することにする。*i*-type は O.E. の neuter, sing., *þis* に形容詞の強変化語尾 *-e* が付加されたもので，rivalry の最初は有利な地位を保っていたが，final *-e* が発音されなくなるにつれて，数の区別に有利な *these* (e. M.E. *þĕs* に形容詞の強変化語尾 *-e* が付加され *þę̄se* となり15世紀には *þę̄se* となったもの) が増加する。そして *these* は，Heltveit (pp. 86ff.) によれば1475—1500年の間に *thise* を圧倒し，1500年以後は *thise* はまれにしか見られなくなる。

このような歴史的背景のなかでWとCの実態を比較してみよう。WとCの指示代名詞の対応関係と統計の詳細は拙稿 (1963a) で詳述したのでここでは繰り返えさず，当面の問題だけを述べれば次のようになる。すなわちWでは *thes* 271例，*these* 26例，*thyse* 1例が現われ，*thes* は15世紀後半の英語では *these* の異綴字の一つと考えて差しつかえないと思われるので，圧倒的に多いのは *e*-type といえる。一方Cも *e*-type (Cでは綴字 *these* のみ) が多数を占めている作品であるので，我々の注目の対象は保守的な *i*-type の分布となる。

調査の結果，この *i*-type はWの1例（W *thyse* 147/23）に対してCの5例（C *thyse* 774/38, *thise* 494/5, 520/15, 738/23, 763/26）とわずかであるがCで増加していることが判明する。なお Caxton 自身は *e*-type の優勢が決定的な歴史的背景のなかで，Heltveit (p. 88) が，"Why, then, did Caxton use *thise* instead of *these* to such an extent that it is impossible to tell whether he had a preference for the one or the other?" と述べているような言語習慣をもち，*i*-type も捨て切れずにいる。

次に *tho*, *thos*(*e*) に移る。O. E. 以降 Northumbria では *þā* が存続し，また *þās* (=those) が「O. E. *þā*＋複数語尾 *-s*」の語形成によって生じている。一方，Northumbria 以南では，母音が円唇化された *þǭ* が使用されていたが，北方形と同一の語形成による *þǭs* が，Heltveit (pp. 113—126) によれば北方形 *þās* とは独立に15世紀にロンドン標準英語に現われ，極めて急速に広まり，*tho* と *thos*(*e*) が競合するようになった。世紀中葉には新しい *thos*(*e*) が伝統的な *tho* にとって代わり始め，1475—1500年の間にはその地位が完全に逆転し，16世紀初頭以後は *tho* は archaic と感じられるに至っている。

さて我々の資料であるWでは *tho*(*o*) 118例，*thos*(*e*) 13例が見出され，古い *tho* が多数を占めている。一方Cでも *tho* が89例と多数であるが *those* は1例である。このようにW，Cともに古い語形が圧倒的であるが，新しい *thos*(*e*) がWで13例（W *those* 398/20, 600/8, 682/8, 720/26, 1204/26, *thos* 586/29, 597/18, 603/22, 627/4, 712/20, 906/34, 994/8, ,1076/14）見出されるのに対し，Cでは僅かに1例（C *those* 287/19）とほとんど姿を消し，Cは conservative な方向に改定されていることは注目されよう。Heltveit も彼の資料によりこの点に関する Caxton の言語習慣を調査しているが，彼は，急速に広まったこの新しい *those* に対し Caxton が cautious な態度をとっていることが判明したとし，"... Caxton was not ahead of the general stage in the development of the language on this point." (Heltveit, p. 124) と述べている。

次に第五の3人称・単数・現在の *-s* 語尾に移る。この *-s* 語尾は10世紀後半の Northumbria 方言に最初に現われ，主として北部方言の特徴をなすものであったが，15世紀に南部や London とその周辺に流布し始めている。London 標準英語における *-s* 語尾の起源については，助動詞 *is* の類推説，北部方言の南下説等の諸説があるが，ここではそれらはさておき，当面の問題と関係のある15世紀後半の実態に触れるにとどめよう。簡単にいえば，当時の London 標準英語の文献では一般に多出する傾向はなく，とき折の散在が認められる程度であるが，口語においては既にかなり広まっていたと推定されており，例えば A. C. Partridge (p. 156) は E. Holmqvist (p. 126, p. 132) を要約した形で，"Holmqvist has adduced sufficient evidence to show that, by the end of 15th C, *-s* was supplanting *-th in colloquial usage* in London and the contiguous counties and that the practice was spreading to other dialects not previously affected by Northern contacts." と述べている。

ところで筆者によるWの調査 (cf. 拙稿, 1963b) によると，Bk. V を除外した全篇中，*-th* 系語尾が圧倒的多数のなかで *-s* 系語尾が65例散在し，主として非人称動詞や dialogue の部分に分布しているが，Cではそれが僅か4例[8]と減少し，Wの *-s* 系語尾はほとんどすべてCの *-th* 系語尾に対応することが判明している。(e. g. W me *repentys* sore of youre grete damage 34/13 → C *repenteth* 59/5, W *Mesemys* 501/23 → C me *semeth* 370/32, W me *wantis* an horse 116/22 → C me *lacketh* an hors 115/15, W what *ayles* you 1132/6 → C *eyleth* 782/7, W he *gretys* you all well 268/32 → C *greteth* 196/20, etc.). こうした事実によっても Caxton が radical な態度を取らなかったことが明らかとなろう。参考のため，translator, author としての Caxton を調査すると，彼の言語習慣がもっぱら *-th* に依存するものであったことが分る。

以上で，まず，Sandved (1968) が通時論的な問題提起にもかかわらず，実際には共時面での調査を行い，共時面と通時面を混合させた表現で結論を述べ

ているので，彼の結論から本来 Caxton が通時的な意味で innovator であるという印象を与える可能性があることを指摘した。そして，通時的意味での 'innovator', 'conservative' 論を議論する方法は，WとCを比較してWと差異の生じるCの部分に英語史的評価を与えることであると指摘した後，試みに5つの言語現象をこうして考察してみたところ，Caxton は MS. に忠実であれば歴史の流れに対し進んだ言語現象をわざわざ改訂し，いずれも conservative な方向に書き換えていることを示した。勿論5種類の現象だけでは十分ではないが，WとCの言語の記述は筆者の継続した研究課題であるので今後さらにおし進め，Caxton についての通時的な面はもとより，Sandved の係っているような共時的な面[9]についても一層の解明に資する資料を提供して行きたい。(1973. 8. 20)

Notes ;

(1) 本稿は昭和48年4月29日の名古屋大学英文学会総会における発表に加筆訂正を施したものである。

(2) Sandved (p. 436) 自身も論述方法の矛盾を意識していたようで，"The present investigation is basically a synchronic study, so comparatively little attention has been paid to the question of 'conservatism',..." と前置きしてから上記 "But..." 以下の結論(2)を述べているがこの "But" から通時的な内容を述べようという気持ちが窺われる。

(3) または第一回目の転写に携わった scribe の英語 (cf. Vinaver, p. cvi)。

(4) ただし，これには，Wは Caxton が印刷の際利用した copy text ではないという制約があることに言及しておきたい。

(5) これらの完全な資料については拙稿 (1965) 参照。

(6) ただし逆の傾向が2例存在する。cf. 拙稿 (1965), pp. 54—55.

(7) 詳細については「Malory における前置詞——その出没について」岐阜大学教養部研究報告 (1973)・第9号で扱う予定。なお以下のCの reference のうち 301/10, 771/5 における *a* が不定冠詞でなく *of* の弱形である可能性もあることを付記しておく。

(8) Cのこの4例は *repentys* 836/38 *werches* 848/1, *bytokenes* 847/23, *has* 784/28 である。

(9) 例えば拙稿 (1972) において，*-n* の有無に関し，*be* 動詞の不定詞や過去分詞 *beten*, *wonnen*, *drawyn* 等は，Sandved の一般的結論とは逆に，CがWより

allomorphic variation の多いことを示した。

Bibliography

Baldwin, C.S. *The Inflections and Syntax of the Morte D'Arthur of Sir Thomas Malory*. Boston: Gin & Company, 1984.

Crotch, W.J.B. (ed.) *The Prologues and Epilogues of William Caxton*. London: Oxford U.P., 1956.

Ellegård, A. *The Auxiliary do: The Establishment and Regulation of its Use in English*. Stockholm: Almqvist & Wiksell, 1953.

Engblom, V. *On the Origin and Early Development of the Auxiliary do*. Lund: C.W.K. Gleerup, 1938.

Heltveit, T. *Studies in English Demonstrative Pronouns*. Oslo: Akademisk Forlag, 1953.

Holmqvist, E. *On the History of the English Present Inflections Particularly -th and-s*. Heidelberg: Winter, 1922.

Knight, S. *The Structure of Sir Thomas Malory's Arthuriad*. Sydney: Sydney U.P., 1969.

Martin, L.S. *Sir Thomas Malory's Vocabulary in 'The Tale of Arthur and Lucius', 'The Tale of Sir Gareth', and 'The Tale of the Sankgreal': A Comparative Study*. Unpublished Dissertation, U. of Pennsylvania, 1966.

Matthews, W. *The Ill-Framed Knight: A Skeptical Inquiry into the Identity of Sir Thomas Malory*. Berkeley and Los Angeles: U. of California Press, 1966.

Moore, S. "Earliest Morphological Changes in Middle English." *Language* IV (1928).

Partridge, A.C. *The Accidence of Ben Jonson's Plays*. Cambridge: Bowes & Bowes, 1953.

Reed, D.W. *The History of Inflectional n in English Verbs Before 1500*. Berkeley and Los Angeles: U. of California Press, 1950.

Römstedt, H. *Die englische Schriftsprache bei Caxton*. Gottingen, 1891. (筆者未見で間接的引用。)

Salus, P.H. "Reviw of Sandved 1968" *English Studies* LII (1971).

Sandved, A.O. "A Note on the Language of Caxton's Malory and that of the Winchester MS." *English Studies* XL (1959).

——— *Studies in the Language of Caxton's Malory and that of Winchester Manuscript*. Oslo: Norwegian U.P., 1968.

Shaw, S. "Caxton and Malory" in *Essays on Malory*, edited by J. A. W. Bennet. Oxford: Clarendon Press, 1963.

Šimko, J. *Word-Order in the Winchester Manuscript and in William Caxton's Edition of Thomas Malory's Morte Darthur* (1485)—*A Comparison*. Halle: Max Niemeyer, 1957.

Sommer. H. O. (ed.) *Le Morte Darthur by Syr Thomas Malory. The Original Edition of William Caxton Now Reprinted and Edited with an Introduction and Glossary*. 3 vols. London: David Nutt, 1889—91. (Cの翻刻版。引用に際してはCと略。)

Vinaver, E. (ed.) *The Works of Sir Thomas Malory*. 3 vols. Oxford: Clarendon Press, 2nd edition, 1967 (Wの校訂版。この text 引用の際Wと略。)

Wiencke, H. *Die Sprache Caxtons*. Leipzig: Verlag von Bernhard Tauchnitz, 1930.

Wyld, H. C. *A History of Modern Colloquial English*. Oxford: Blackwell, 1956.

拙稿「指示代名詞の語形—Malory を中心に」ことばと文学・第二号 (1963 a), 「Malory における動詞の屈折語尾」 *IVY*, vol. 3 (1963b), 「Malory における *do*-form について」岐阜大学教養部研究報告・第一号 (1965), 「Malory における inflectinal *-n* について」岐阜大学教養部研究報告・第八号 (1972).

付記：本稿校正中に Kato, T. (ed.) *A Concordance to the Works of Sir Thomas Malory*. Tokyo: U. of Tokyo Press, 1974 が出版され，それにより拙稿 (1963 a) からの統計的数値を若干修正したことを付記する。